

中米帰国研修員活動調査報告 <その2>

中米帰国研修員活動調査報告の第二報として、今回はエルサルバドルで訪問した4名の帰国研修員の活躍を報告する。

コスメ氏 2011年小農支援のための野菜栽培技術

カトリック大学所属のコスメ氏は本邦研修で養液土耕の個別実験を計画・実施した経験を買われて、帰国後は調査研究部門のコーディネーターとして抜擢された。現在は35名の研究内容を総括する役割にある。また本邦研修での施設園芸の経験から、同大学で建設予定である地域の小規模農家の技術指導に利用する雨よけハウスの栽培管理もコスメ氏が行う予定である。

ロベルト氏 2012年小農支援のための野菜栽培技術

ロベルト氏もコスメ氏と同じカトリック大学に勤務しているが、ソーシャルユニット部門の所属であり、農村開発プロジェクトを立ち上げ、実施に移すのが主たる業務である。ロベルト



上司(左)からの期待が大きい
ロベルト氏(右)

氏は帰国後間もないことから、上司へ本邦研修の成果について期待することをインタビューした。その結果、ロベルト氏には現場にある問題を見出す視点と分析する能力に期待したいとのコメントであった。ロベルト氏自身は、同部門のプロジェクトを見直す3年後に彼のアクションプラン(以下 A/P)である鶏糞を利用したパブリカ栽培を新規プロジェクトとして立ち上げられるよう、基礎調査と試験栽培を進めると意欲を見せていた。

ルイス氏 2011年小農支援のための野菜栽培技術

農林技術センター所属のルイス氏は自身の A/P にトマト青枯れ病に対する接ぎ木技術の確立を掲げ、帰国後一年で台木となる可能性のあるトマト野生種7系統を収集し、種子を増殖するところまで実施した。またルイス氏は A/P の実施のみならず、ボカシ肥や稲藁促成堆肥



高畝で栽培した生育良好なニンジン

の作成をはじめ本邦研修で学んだ技術の活用に積極的であった。栽培技術においては、当地における土壌が固く、ニンジンが十分肥大しないという問題を、砂を混ぜた土壌を高畝にすることで、ニンジンの肥大促進を図っていた。

また当センターが実施する農家学校のカリキュラムの作成を担当しており、本邦研修を参考に講義・実習がリンクしたカリキュラムを作り上げたいと意欲的であった。

セサール氏 2010年小農支援のための野菜栽培技術

ルイス氏と同じ農林技術センター所属のセサール氏は2012年3月まで東部地域零細農民支援プロジェクトのカウンターパート(以下 C/P)として活躍し、現在もその業務を引き継いで野菜栽培の指導にあたっている。担当地域もまた青枯れ病が深刻な問題であったが、彼はボカシ肥を混ぜた山土で15cm程度の高畝を作ることで土壌病害を回避することを試みたところ、良好な結果が得られた。この手法は点滴灌漑の普及により可能になったが、日本で見た高畝栽培がヒントになったとのことであった。報告者が日本に帰国したのち、青枯れ病にくわしい植物病理研究者にこの手法を確認したところ、ボカシ肥による土壌微生物相の改良、高畝による排水性の向上、点滴灌水による節水管理は理にかなった防除法であるとのコメントを得た。現地におけるもう一つの問題であったウイルス病は、プロジェクトが導入したネットハウス栽培によって克服された。セサール氏は40戸の農家に野菜栽培の技術指導をしているが、現在17戸がこの栽培手法を取り入れており、2013年にはさらに7戸の農家を実施する計画がある。



ボカシ肥と山土を混ぜて作った青枯れ病の見当たらない生育良好なピーマン



ルイス氏もセサール氏も帰国後の積極的な活動と本邦研修の具体的な活用事例を見せてくれたが、プロジェクト C/P のセサール氏に比べ、ルイス氏は職場から A/P への理解を得るのが難しく、「通常業務に支障ない範囲」での活動を許されたのみだった。それでも A/P を実施しているのは彼の弛まぬ努力の賜物であるが、一方でこれは C/P であれば本邦研修の成果を効率的に活用できる可能性を示唆している。

本調査から帰国後、まもなくルイス氏から連絡があった。彼の地道な努力と A/P が研究部門のトップの目にとまり、本部研究部門で本格的に A/P に取り組むことになったとのことであった。彼の挑戦はこれから本格的に始まるようとしている。